

レファレンス コーナー

クレオール主義 ——カリブ海から のメッセージ——

村井友子

近代の夜明けとともに西列強諸国が推し進めた植民地政策と重商主義によって、多数のアフリカ人たちが一七世紀以降、奴隷としてカリブ海域やアメリカ大陸に連れてこられた。砂糖黍プランテーションの労働力供給が主な目的であった。植民地時代のカリブ海世界は、欧米諸国侵略後の先住民の急速な消滅により、こうして連れてこられたアフリカ人奴隷と白人プランターによって形成されてゆくことになった。またこれにくわえ、一九世紀になると英領カリブを中心にインド系や中国系契約移民が流入してゆき、外人人たちによる異質な文化の混濁が進んだ。

こういったカリブ海諸国の多くは、民族主義的な基盤と文化的アイデンティティの脆弱性という問題を抱えている。なかでも仏領カリブは、ラテンアメリカ諸国に先駆け一八〇四年に独立したハイチを例外として、ミッテラン社会党政権時代に一定の自治権は承認するが政治的独立は認めないという判断が下され（一九八

一年）、フランスの主権下に留まることになった。マルチニックやグアドループ島の知識人たちがフランス文化の普遍主義の呪縛からの解放と自己アイデンティティの創設に強い関心を寄せていったのには以上の事情があった。

マルチニック出身の小説家バトリック・シャモアゾーとラファエル・コンフィアンおよび仏領ギアナの言語学者ジャン・ベルナベの合作『クレオール礼賛』（平凡社 一九九七年）の冒頭は「ヨーロッパ人でもなく、アフリカ人でもなく、アジア人でもなく、われわれはクレオール人であると宣言する」で始まり、言語と文化の多様性の認識を出発点として自己アイデンティティを探索する建設的な心的態度を宣言した。マルチニック出身の詩人にして政治家であったエメ・セゼールらが一九三〇年代から一九六〇年代に興じたネグリチュード（アフリカ性の再評価）文学運動挫折後の空白を埋める形で、クレオール主義は一九八〇年代に文化の関係を理解する主体的ビジョンとして社会思想の新たな地平を開く。また同じシャモアゾーとコンフィアンの『クレオールとは何か』（平凡社 一九九五年）では、仏領カリブにおけるクレオール文学醸成の軌跡を追い、クレオール性の輪郭を浮き彫りにした。

ところで、日本でクレオールが体系的に紹介され始めたのは一九九〇年に入ってからであり、その先鞭を

つけたのが今福龍太『クレオール主義』（青土社 一九九一年版、新版二〇〇一年）であった。このなかで今福は仏領カリブで芽生えたクレオール主義を世界の様々な文化事象理解に使用して、カルチュラル・スタディの斬新な視点を提示した。これを皮切りに日本国内でもクレオールについて活発に論議されるようになり、一九九〇年代後半にはクレオールに関する翻訳書や論考の出版が相次ぐ。例えば『現代思想』一九九七年一月号「クレオール特集」は、コンフィアンやカリブ共通の文化をアンティル性という概念で論じるクレオール文学者エドゥワール・グリッサン、カリブの黒人奴隷の歴史研究家ガブリエル・アンチオープらと日本人研究者の論文・対談集となっている。京都大学で開催されたシンポジウムを纏めた『複数文化』のために——ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』（人文書院 一九九八年）では中国や沖縄なども含む旧植民地文化のクレオール性について論じている。複数文化理解の視点に立つと、単一文化の神話が描き出してきたものとは全く異なる風景が私たちの目の前に立ち現れる。

他方、大杉高司の『無為のクレオール』（岩波書店 一九九九年）では、トリニダード・トバゴのクレオール性が論じられている。大杉によれば、アフリカ系三九・六％、インド系四〇・三％、混血一八・五％、白人系〇・六四％、中国系〇・三

八％と文字どおりの多民族国家トリニダード・トバゴのクレオール性は、フランス領カリブ海地域において主張される主体中心主義的なクレオール性とも、英語圏カリブ海諸国のナシオナリストによって主張される有機的ハイブリディティとしてのクレオール性とも異なるものである。

『コンパスからカストロまで——カリブ海域史 一四九二—一九六九』（岩波書店 新版二〇〇九年）の著者であるトリニダード島出身の黒人歴史家エリック・ウィリアムズは、一九六二年の独立とともにトリニダード・トバゴの首相に就任し、アフロ・クレオールを文化的求心力として国民国家の統合化政策を推進するが、結局その試みは失敗に終わっている。失敗の要因のひとつには文化多元主義の立場から同化融合主義を否定するインド人コミュニティの存在があった。

このように一口にカリブ諸国といっても人種と文化の混濁の仕方は各国固有の社会形成の歴史によって大きく異なる。遠藤泰生・木村秀雄編『クレオールのかたち——カリブ地域文化研究』（東京大学出版会 二〇〇二年）は、地域研究者達がラテンアメリカ諸国のクレオール（文化の混濁）の多義性と多様性についての分析を、それを成立させた歴史と政治の考察にまで踏み込んだ形で行っている。

（むらい ともし／図書館逐次刊行物課主任）